

「学校スタンダード」 を越えて

4月。新しい出会いと学びの始まりの季節。子どもたちの弾む靴音が聞こえてくる。学校は子どもと教師が、子どもたち同士が、つながり合い学び合い互いに影響を与えながら、かけがえのない個性的な物語を生み出していく場所である。ところがいま学校は、みずみずしい教育の営みが否定されきわめて貧しい関係の場に変質させられようとしている。「学校スタンダード」という名のもとに全国各地の学校で「子どもの行動規範」が決められ、すべての学校・教職員に「ぶれない」指導の徹底が求められている。「はい」と明るい返事」「子どもをほめる。1日10回以上」「問題行動・累積10回で保護者召喚」等々……。それは、子どもたちの生活や学習スタイルにまで及び、子どもの微妙で揺れる感情等への配慮はない。教師に固い枠組みの「指導マニュアル」を押しつけ、子どもの逸脱を許さず、学習への自由で創造的な取り組みを否定している。

一方こうした動きと重なるように「4月の3日間で1年間が決まる」「『黄金の3日間』を大切にできなかったことがその後の学級の荒れにつながった」などの言葉が声高に叫ばれ、若い教師の心に不安と圧迫を加えている。「揺れ」「戸惑い」「沈黙」あるいは「微かな兆し」などが無残に切り捨てられていく。そこには子どものもつ「未来を生み出す力」と「教育の可能性」に対する強い不信と恐怖があるように思われる。

子どもと教師の人間的な喜びに応える本當の教育のあり方を探りながら、教室にやわらかな出会いを生み出していきたい。